経済活動と歴史研究：
人間を知るということ

日々の暮らしを成り立たせるため、私たちは働きます。企業や会社というものは、売上と利益を上げるため、新商品の開発に試行錯誤しています。残念というべきか、「飛ぶように売れる商品」というものは、現実にはほとんど存在しませんし、あったとしても、それは一時的な現象に過ぎません。かつて、どれほど購入困難だった商品でも、現在では（代金さえ用意できれば）容易に入手できる。そうした事例を、私たちはいくつも思い浮かべることができます（もっとも、「ビートルズのサイン入りギター」のような複製不能な希少品や、美術・工芸品

大谷 実
Otani Minoru

［研究テーマ］
近現代ドイツ社会経済史

は別ですが……)。

私たちが暮らす資本主義社会では、世に送り出された商品は、競争に晒されています。消費者はずらりと棚に陳列され、Web 上でリスト化され、口コミ欄に星マークのついた類似商品のなかから、価格、性能、デザインなどを比較し、最終的に一つの商品を手に取ります。その理由として、最近では「コスパが良い」(コスト・パフォーマンスが良い)という言い回しがよく聞かれます。値段の割に性能や味などがよく、大まかに言って「お買い得」という意味で用いられています。そこには、一種の損得勘定が働いている訳です。なるべく支払い額を低く抑え、最大限の利益を得よう……という心理も垣間見えます。

私たちはこうした動機に基づく経済活動を自明のものと受け止めていますが、人類の長い歴史を振り返れば、商取引そのものは、資本主義の成立以前から存在していました。ここでは中世ヨーロッパにおける状況をごく簡単に振り返ることで、経済活動がどのように営まれていたのか、考えてみることにします。

中世ヨーロッパでは、宗教と経済活動の関わりを無視して語ることはできません。いまや経済活動にとって、銀行をはじめとした金融業はなくてはならない存在ですが、キリスト教では、金貸しが禁じられ、「卑しい仕事」と見なされておりました。例えば、旧約聖書には「兄弟に利息を取って貸してはならない」(申命記 23 章 19 節)という記述が見られますように、金融業によって、利益

を得ること（金銭だけでなく、食物など物品も含まれます）が認められておりませんでした。

しかしながら、大変興味深いことに、「キリスト教徒と異教徒」との間の金貸しであれば、例外的に認められておりました。あのシェイクスピアの代表作の一つ『ヴェニスの商人』で、主人公アントニオに「身体の肉１ポンド」を担保として金貸しをする人物シャイロックがユダヤ人となっているのは、こうした事情が大きく絡んでいます。

経済活動を営む際、当時の人々にとって、宗教的なルールは根本的な前提条件として存在しており、彼らの行動を規定していた訳です。

ユダヤ教関連で、もう一つ例を挙げます。ユダヤ教では「ハヌカー」という大切な年中行事があります。紀元前 165 年、異教徒に占拠されていたイェルサレムを奪還した際、神殿に残っていた聖なる油の入った甕（かめ）に火をつけたところ、１日しか持たないはずなのに、８日間燃え続けたという伝説的なエピソードがあります。これに因んで、毎年 12 月、各家庭では８日間蝋燭に火を灯し、油を使って揚げ物を作り、親しい人々と集まり、子どもたちはゲームをして遊び、お祝いをする……という習慣が現在までも続いています。

今回ご紹介した事例から、私たちは、歴史や文化、宗教や思想、あるいは政治など、できる限り広範な学問分野の知見を摂取し、考えていくことの必要性を感じます。それは、決して簡単なことではありませんが、そのような

努力を重ねていくことによって、経済活動、ひいては人間の営みをより深い次元で理解できるようになるのです。

　現在の私たちの日々の生活にも、今回紹介したものと似た事例があるのではないでしょうか。ともに探し、考えて頂ければ、大変嬉しく思います。